
アル・ラーズの日記

斗詩わたる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アル・ラーズの日記

【Nコード】

N8692C

【作者名】

斗詩わたる

【あらすじ】

奇跡的に生き残った少年アルと怪盗トリックスターの物語。というか、怪盗の日常生活的ストーリー。

くプロローグく（前書き）

この物語を通して、私の作品の世界観を説明していきます。笑い有、涙も有。皆さんと一緒に、作品を完成させていけたら幸せです。

「プロローグ」

「プロローグ」

それは、見渡す限りの“死”であった。

小さな名もなき村　決して裕福ではなかったが、そこは豊かな自然に囲まれた安らぎの土地だった。

だが、今は絶息しそうな“死”の気配に包まれている。

破壊の限りを尽くされた、理不尽な暴力。

予兆もなく訪れた死神の、冷酷な大掃除。

その悪夢が具現化した世界に一人、少年は生き残った。

見上げた空は、ずっとずっと泣いている。

「へえ。生き残った幸福者がいたんだ」

力なく動けずにいた少年を見下ろす、薄青の瞳。

それは彼の意識を吸い込むように輝いていた。

「君の名前は？」

乾いた喉から、少年はそれでも必死に訴える。この機会を逃がせ

ば、もう絶対に助からないと知っていたからか。

「ぼ、ぼく、は」

彼女は、四苦八苦する彼をずっと待っていた。

その微笑みは、少年を応援しているかに優しくして。

「ア、ル・ラー、ズ……」

頭を撫でる手は、まるで聖母のように温かい。

「偉いぞ。よく言えたね」

だから、彼女は少年に努力の御褒美をあげたのだ。

「私はクリスティーヌ・ルパン。
初めまして、アル・ラーズくん」

それが、今から200年前の話。

僕と義姉さんが出会った、奇跡の朝。

1515年、12月10日のことだった。

くプロローグ 終く

第一話 主人公死す！？（前書き）

この話はご好評につき、“星空と銃弾と紅い夜”の続編となっております。皆さん、応援ありがとうございます！

第一話 主人公死す！？

僕は“力”を手に入れた。

勝利と破滅をもたらす諸刃の剣。

その“力”は無数の血を吸い、魂をも食らってきた。

原因は、わかってる。

けれど、誰もが止められないんだ。

その“力”が、あまりにも強大すぎるから。

その“力”が、あまりにも万能すぎるから。

自分の無力さに泣いた人間だからこそ、この、“力”を使うのだ。

そうして辿り着く先が“消滅”と知りながら。

僕は、それでも前へと進む。

だって、僕はもう どこにも戻れないから。

だって、僕はもう どこにも帰れないから。

だって、僕は 。

朝の澄んだ空気に誘われ、僕は起床した。

気分は爽快。

まだ寝ぼけてる身体をほぐしてあげて、すぐに身支度を整える。

キッチンでは二人分の朝食を用意して、準備が整う頃に姉さんを起こしに行く。

これは僕の日課であり同時に試練でもある。

きちんと平静の準備をしてるのに、いつもいつも完敗してるから。

だから今日こそは、と意気込んで扉を開ける。

この部屋は、他の部屋と違って、やたら広い。

どれだけ広いかというと、成人男性が大の字で20人は寝れるんじゃないの、って思えるほどにバカ広い。

だから大人数用の客室なのかな、と勘違いするなかれ。実はこの

部屋、たった一人のためだけの寝室なのである。

いや、寝室という言葉では生温い。

聖域、地獄、桃源郷、鬼ヶ島　とりあえず、こんな感じ？

そう聞くとまるで怪物の棲み家っぽく聞こえるけど、あながち外れてもないから何も言えなかったりする。

ちなみに僕は、ベッドと勉強机が置ける程度の、標準的な広さの部屋。

あんまり広いと掃除が大変だしね。

「　　っていうか、この部屋も僕が掃除してるんだけどね」

本人の目の前で。

.....。

もう一度、あえて言わせてもらっけど。

本・人・の・目・の・前・で！

ここ大事。

すっごく大事なトコだから。

僕が一生懸命汗かいて掃除してるのに、本人は読書に昼寝やら趣味とか遊び放題。

何度も何度も繰り返し掃除をさせられる時には『それだったらちったあ手伝えコンチクショウ！』などと思ったけれど、その思った回数があまりにも多すぎて逆に悲しくなるのが現状……。

正直、泣きそう。

そんな悪魔　　もとい張本人さまが、今は僕の目の前で無防備に眠っていらっしやいます。

清潔感あふれる白地のベッド　　これも僕が掃除しました！

はキングサイズ。そこに、淡い紅の髪の毛がぴょこん、と可愛く映えていた。

それだけでも僕の心臓はドキドキしてるのに。

掛け布団の上からでも見て取れる、その非常に滑らかな曲線を描く身体のラインに目が釘付け。思わず生唾を飲まずにはいられない、ある種の芸術性さえも窺える極上の肢体がそこに横たわっていた。

僕の心の中は、すでにスタンディングオベーション。

こんな特権、世界中を探してもたぶん僕だけだろう。

しかし、早まるな。

これを羨ましいと思うのは僕の頭上を見てからにしてください。

「　　やっぱ、ヤだよね……」

鋭利に尖った切っ先を下ろし、僕を虎視眈々と付け狙う、一本の“剣”　　それはどれだけ前後左右に動いても、付かず離れずの位置でぴったり頭上に居座り続けている。

それは、いつでも僕を殺せるという意思表示。

そりゃあ、最初は慣れなかったですよ。僕も、鏡でびっくりしたしね。けれど、この部屋の主が主なので、こんな不思議現象もため息一つで納得です。

ちなみにこの“剣”は姉さんが寝ている間の、この寝室にいるすべての生命体にのみ該当する。だから、姉さんを起こすか、この部屋から出れば“剣”も自動的に消えるというわけ。

発動条件は、もちろん言わずもがな。

ぶつちやけ帰りたい。

でも夜行性の姉さんは朝が遅いので、僕が起こしてあげないと昼間での授業が受けれないのだ。まだまだ学ぶべき事の多い僕には、死活問題である。

「まあ、その前に、姉さんに殺されそうだけど……」

僕の姉さんは、世界中のトップニュースを飾る“怪盗トリックスター”である。誰もがその姿を見たことがなく、一度も失敗していない盗賊。

けど、その無敗記録も一年前に盗もうとした、アン女王の至宝をヴィルヘルムとかいう男に邪魔をされ、初めて失敗してるんだけどね。

当時の僕はというと、姉さんを狙う“使徒”の序列5位を相手に戦い、必死に逃げ延びていた。姉さん曰く『ヴィルっちと戦ってたら、アルなら十秒で逝けたわよ』だそです。

うう……………。

それで任されたのが、“使徒” 姉さんの、『アイツならアルと相性が良いからさ、死ぬ気で頑張れば死なないわよ』の言葉に騙されて、マジ死にそうになりました。

だってね、『死ぬ気で頑張れば死なない』って姉さんは言ったんだよ？

“死ぬ気で頑張れば死なない”

……………。

姉さんは正しい。

“死なない”と言っただけで、“勝てる”とは一言も言っていないのだ。

.....。

詐欺だよおおお！！

おかげで戦闘中なんか“マジでヤバい！？”と思っただことが13回くらいあったんだよおおおおお！！？

そしてそれは、今でも同じ。

姉さんに一歩近付く度に、僕の心臓は破裂しそうなほど高鳴っていく。

血液が沸騰して、頭の中が真っ白になりそう。

でも、おそろおそろにベッドを覗いて見ると、姉さんは掛け布団で顔まで覆い隠していた。よっぽど眠いのか、部屋の電灯を点けた時に潜り込んだんだろう。

これなら勝機はある！

いつもなら、反則級の破壊力を持つ寝顔も、今日は見えない。

ボクシングの試合で言うなら、アマチュアの対戦相手にいきなりヘビー級世界王者が出てきちゃったよおい！？　みたいな感じなんだから。

それが、今日はない。

ということは今日こそ男子の威厳を保ったまま姉さんを起こせるということになる！

まさしく、千載一遇のチャンス！

と思ったのにね、ベッドの脇で立ち止まると、それはもう、めっちゃめっちゃ可愛い寝息が静かに聞こえてくるじゃないか！

.....。

凶器だよおおおお！

反則すぎるよおお！

ボクシングの試合で言えば、アマチュアの対戦相手がヘビー級世界王者じゃなくてホッとしている時になぜか“本物の熊！？”が現れちゃったよマジで！？　　ぐらいいんだから！

そう。

これはもうボクシングの試合じゃない（試合でもない）。ただの一方的な生殺しである。

.....。

ムリだよおおおお！

コース料理は前菜からだよおおおおお！！

なのになあああんでデザートを持ってくるんだよおおおおお！！！！

イジメですか！？

これは新しいイジメですか！？

ヒドい！

ヒドいよ姉さん！

.....。

でもね。

ゴクツ、ってまた思わず生唾を飲んじゃったんだよおおおお
お！！

健全な青少年を何だと思ってるの！？

憎い。

思春期の、若さゆえの過ちが憎い。

だが！

今日の僕は一味違う！

「早まるな、アル・ラース！ お前は我慢できる男だろッ！」

そう！

今、僕が欲望に身を任せて姉さんを襲ってしまったら、頭上で待
機してる“剣”がチャンス！ とばかりに落下してしまうじゃない
か！

それに もし無事に回避できても、姉さんが起きてしまったら
.....。

身の毛もよだつ、地獄絵図！

それだけは！
それだけは避けなければ！！

「……………よし！ 耐えたぞ！ 僕は耐えることができたぞ！」

同志たち（世の中の男性諸君）よ。

僕は悪魔の誘惑に打ち勝つことができました。
これでもう恐れるものは何もありません！

小さく息を吸い、意を決して声をかける。

「姉さん、おはよー……………」

音量三割減の情けない挨拶。

当然、ベッドの寝息に変化はない。

うつ……………。

勇気を振り絞り、僕はボリュームを上げてみた。

「起きろー。朝だぞー」

ボリュームを上げた代わりに、一歩後退り。
彼女は気付いた気配さえ見せない。

うつ……………。

「頼むから起きてよー！ 朝だってばー！」

もう必死です。

そんな僕の願いを嘲笑うかのようにスヤスヤと眠る紅い悪魔。

そして！

ドキドキ暴走する心臓は、時としてとんでもない暴挙に出てしま
う。

「えーい！ 早く起きろー！！」

僕は、僕自身も驚くくらい大胆なことをした。

たぶん というか、間違いなく姉さんの殺人的魅力に勝ちたか
った一心から生まれたと思う。

姉さんの身体を覆っていた掛け布団を、僕は、一息に剥ぎ取った
のだ。「あ、うあ……ブッ」

そうして鼻血ブー。

鼓動が際限なく加速して、一気に心停止。

目の前に現れたのは、寝顔よりも寝息よりも恐ろしい最終兵器だ
った。

寝間着は、サイドに縫い目のないシームレス仕立ての黒色タンク
トップ。首と肩まわりを繊細にパイピングし、その肢体に負担をか
けずジャストフィットすることで抜群の着心地を約束している。美
しいカッティングに洗練性が漂う、ベーシックながらもハイスタン
ダードモデルだった。

さらにその下には、これまた黒色に彩られたショーツがソフトに
フィットしていた。後マチの縫い目がなく、アウターに響きにくい
ボーインググレスタイプである。

しかし！

何よりも目を引くのは、その悶絶死しそうなビッグバンボディに間違いない！

これは男として断言できる！

いや、むしろしたい！

純白のベッドに祝福された芸術品を前に、心の中はフルオーケストラで至福の境地を奏で続けている。

その胸部は、なだらかに盛り付けられたクリームを想起させた。

マシユマロのような柔らかさを孕みながら、決して型崩れすることのない丸みを維持してのけている。少しでも触れてしまえば吸い付くような肌の感触に心を奪われてしまいそんな美巨乳であった。

これよりさらに視線を落とせば、極上の絹で編まれたカーテンの縁に触れたが如きくびれた腰が見て取れた。無駄のない、盗賊活動に必要な筋肉を内に秘めながら、滑らかに引き締まることで最大限の柔軟性を宿した腹部である。

そうして延長上に伸びた手足は、ソフトな繊細性に裏打ちされた細身を演出する。計算され尽くした肢体は細部に至るまで油断なく整えられ、美を謳う芸術品と化している。全身どれもが誇示しすぎることなく、しかしそのどれもが緻密なまま、完璧なるバランスをもって咲き誇る。

「ブツ　く、あ……」

止められない

止まらない

は・な・ぢ・ブー

人類史上初の、本当に悶絶死した少年！

明日のニュースの見出しが、目に浮かびます。

それに。

本当なら、頭上の剣が落ちてくるはずなのに、なぜか落ちてこない。

僕はそんなことにさえ気付かずに、溢れ出る赤い青春に溺れていく。

落ちてくるはずの剣が落ちてこない。

それが意味するところは、たった一つだけだ。

「アル。私を襲うなんて、いい度胸してるじゃない？」

「ひっ」

ゾクリ、と。

僕の背筋を冷たい殺気がなで上げる。

無数の“剣”が、僕の全身を取り囲むようにして宙に浮かんでいた。今にも刺し貫かんと鋭い光を放ちながら。

もはや、ここは光に融ける巨大な冷凍庫。

万物の呼吸を止め、活動を停止させる白刃の処刑場。

そこに侵入した愚かな獲物は、何ひとつとして例外なく切断される。

「あ、あ、の……」

息を吐くたびに細胞が痺れ、痛覚が悲鳴を訴える。

謝った認識に、僕は心から後悔した。

いくら僕が義弟とはいえ、彼女は“超魔十二神将”《アンノウ・ナンバーズ》が一人、序列9位の“快傑盗賊”だ。

綺麗な薔薇には棘があるように。

3000年近い時代を生き抜いた紅い魔人の美貌に心を奪われた男たちは、自分の欲望に打ち勝てず彼女に消される運命を辿るのみ。

「ん？ 何か弁解したいことがあるのかな？」

その美貌の魔人が、ゆつくりと立ち上がる。

首をかしげ、覗き込むように僕の顔を見る。

きつと、僕はだらしなことこのうえない表情だろう。

でも、それでも今のうちに何か弁解しておかないと、この先に待ち受ける運命が恐ろしくてたまらない。

なのに。

僕は口を動かせない。

目の動きすら気取られ殺される。

周囲の空気でさえも、敵意があるかのように冷酷だ。

耐えられない。心が切り刻まれ、今にも意識が壊れてしま
いそう。

噛み合わせぬ歯を鳴らしながら、震える身体は助けを求め、それ
も言葉にできない自分がもどかしい。

「プツ、あはは」

けれど、これは、数秒だけの狂詩曲。

精神を摩耗させた殺意の暴風は嘘のように消え、目の前の姉さん

は手を口に当てて笑っていた。

身体を取り巻く“無数の剣”も、今では幻のように消えている。

「クツ、あはは ごめんごめん。ちよつと脅かしすぎたね。」

助かったあ……。

その事実にも、全身の力が抜けるほど安堵する。

緊張が解け、僕は地面にぺたりと座り込んでしまった。

あの殺気がまだ続いていたなら、僕は間違いなく狂っていただろう。

「でも、アルもちゃんと反省しなさいよ？ もう少して私の剣が頭をぐつさり刺してたし」

頑固なほど起きなかった姉さんのせいだろ！？
と言う元気は、今の僕にはなかった……。

「う、うん……次からは気をつけるよ……」

それが限界。

一気に磨り減った心はなかなか元には戻らないのだ。
だから、反省するとしたら、ここだろう。

ついさっき自分で言った『気をつける』を守っていたら良かったのに。

股間のほど良い温かさとちよつぴりの異臭に気付いた時には、もう遅い。

「ん？ あれ、何か変な臭いがしない？」

気付いちゃったよ！？

姉さん事件です！

決して振り向かないでそのまま朝食の用意されたりリビングへと一足早く行ってください！

僕は他にやる事ができてしまったんです！

「もしかしたら、キッチンの方かも！ まだ調理し終わってないのがあったかもしれないし」

「っていうか、それで隠し通せると思ってるわけ？」

相変わらず状況把握が恐ろしく的確です！

もう逃げられない！

「アル。アンタ、もしかして」

見ないで！

汚れた僕を見ないで！

「フー。ハン？」

呆れた顔で姉さんが指し示す先は、僕の身体の一部分。

あの殺気から解放されたおかげで緊張感が解け、見事なまでに放出しまくる黄金の水の発生源。

「なにか、言い残すことはあるかしら？」

「弁解する言葉もございません……」

とても言葉では言い表せない、ああ無常。

パン、とまるで鞭のように空気を切り裂くビンタが、目にも映らぬ速度で振り抜かれる。

「ぎゃあああああ!？」

結局、いつも通り虚空の彼方へと消える、僕の意識と叫び声。頭部そのものもついていかれそうな、40キロの鉄球が弾丸ライナーで直撃したかのような衝撃だった。

そんな殺人ビンタ反応できるかあああ!？

そうして再びブー。

「クスクス。大丈夫よ。死なない程度に加減したから」

……………色んな意味で生き地獄です。

新連載開始から早々、こんな感じで始まった、いつもの朝。姉さんを起こす毎日が試練。

読者サービスで頑張った僕のあだ名が、次週から鼻血ブーマンにならないよう、祈るばかりです。

というか、こんな主人公でごめんなさい。

でも、苦情は姉さん宛でお願いします。

ちなみに、そんな姉さんと言うと。

「あゝ、お腹空いたなゝって、やゝん　もうできてるじゃない
」

主人公なのに壁で気絶してる僕とか、読者サービス満点だとか、
まったく気にすることなく朝食を食べたのでした。

殺人事件（前書き）

更新が遅れてすみません。頑張ります。

殺人事件

夢を見た。

とても懐かしい夢だ。

僕の、村。

今はもう、なくなった遠き故郷。

僕が生まれ育った村は山奥にある。

人口はわずか千人。

本当に小さな村だ。

でも。

そんな何もない村でも大自然に囲まれた満天の星空だけは、
とても綺麗だったんだ。

それは、子供ながらに感じていた、僕の村の、唯一の自慢だった。

そして、唯一の自慢が蹂躪された。

下卑た笑い声。

人間を見下した視線。

昨日まで、ごく平穩に過ごしていたはず日常がたった一人の気紛
れで、あっけなく壊れていく。

みんなから頼られてた高齢の村長も。

隣家でお世話になった仲睦まじい老夫婦も。

ついさっきまで一緒に遊んでいた友達も。

少ないながらも夕食を作ってくれた母も。

みんなみんなみんな！

アイツに殺された！！

僕は戦った。

そして負けた。

その、人ならざる力はあまりに圧倒的すぎて、立ち向かった誰もが逆に殺されていった。

僕だけが助かった。

それが姉さん。

アイツは逃げるように去って。

姉さんは、傷だらけの僕に手を差し延べた。

それが17歳の冬。

僕と姉さんが出会った運命の日だ。

あれから僕は姉さんと行動を共にしている。

僕の目的は二つ。

幼馴染みを殺した男を殺すこと。

そして。

僕の村を破壊した男を殺すことだ。

それが僕の誓い。

無力さに泣いた悪夢の一人きりの誓いだった。「……………うっ……………あ、頭がガンガンする……………」

目覚めて早々、右頬のとてつもない痛み。

それはもう、右の歯がぜんぶ虫歯になっていてお祭り騒ぎしてるような感じ。

はたメーワクなこと、このうえない。

でも、その原因自体はすぐにわかった。

「……………良かった……………顎がまだ残ってて……………」

ビンタだ。

あの、絶妙な力加減で振り抜かれた、姉さんの殺人ビンタ。

死んだと思った。

いや、マジで。

だって“使徒”よりもぜんぜん怖いんだもん。
触らぬ魔人にたたりはなし。

でも。

「あ、やっと起きたか、鼻血ブバーマン」

思い出したくもない、前回のトラウマ。

軽快なフルートの如き可憐な声質の持ち主は、この隠れ家の中に
おいてあの人しかない。

「うっ、姉さん。せめてそれだけは」

止めて。

そう言おうと、後ろに振り向いた瞬間。

.....。

一億年でも

二千万年でも

ア・イ・シ・テ・ル

素晴らしいの一言。

ポニーテールの髪。

赤縁の眼鏡。

ミニスカニーソ。

無敵艦隊もびっくりのトリプル役満！

むっちむちのボディにぴっちぴちの教服。

いったい何人の男性を悩ませるつもりなのか。
でも。

そんな姉さんが大好きです！

「アル、いつまで寝てるのよ。もう昼よ？ ほら、早く着替えて」

そう言えば忘れてた。

僕の下は前回の失態で汚れてたんだっけ。

「う、うん。ごめんね、すぐ着替えてくるから」

確か今日は僕が昼食を作る番だったっけ。

ご飯については交替制で、いつも姉さんの料理に下を巻いている。
僕もそこそこだけど、姉さんに比べれば足下にも及ばない。ましてや、世界中を3000年近くも生きてきたんだ。その種類と技量たるや、この世界で太刀打ちできる人はまずいない。

僕はサツと身体の汗を拭いてから、服を手早く着替えた。

今日は故郷の料理。

リビングで待ち続ける姉さんは、紅茶を飲んでくつろいでいた。

「出来たよ」

出来た二人分の昼食をテーブルへと運んでから席に着く。

「遅い。もうお腹ペコペコ」

「ごめんごめん。」

今日は僕の故郷料理。でも、実はあまり覚えてなかったから、思い出しながら作ってみたんだ。きっと口に合うと思うんだけど……」

「うん、だいじよぶ　空腹は最高の調味料ってね　さてさて、それじゃあ……いっただっきま〜す」

上品にスプーンを口に運ぶ姉さん。その表情は満足げだった。

僕も一口食べてみる。ほぼ、完璧に再現できた昼食に、僕たちは上機嫌で平らげていく。「そういえばさ、アル、知ってる？」

不意に姉さんが尋ねてきた。

「何を？」

「最近、近くの町で殺人事件が起きてるらしいのよ。怖いね〜」

怖いのは姉さんです。

「殺人事件って、それはまた穏やかじゃないね」

「そ〜なのよ。おかげで私みたいな弱い女の子なんか、夜も怖くて眠れないし……」

誰が“弱い”のか。

少なくとも、この隠れ家にはいないよね。

「それって、いつ頃？」「初めは一ヶ月前から、かな。フツの殺人には興味ないけど、これには別の興味があるのよ」

「興味って？」

「人肉食い」

「ブッ」

むせた。

「ね、姉さん！ 食べてる時にそんなこと言わないでよ！」

「死体が死体じゃないんだってさ。まるで食べ散らかしたような感じだって、オっちゃんが言ってた」

オっちゃん……？

ああ、織田さんのことか。

確か、日本の僧だったっけかな。姉さんが国宝を盗んで以来、ずっと追いかけてくる地獄耳。

ホント、魔術も使えないのにどうやって的確に追いつくんだろう？

「織田さんに会ったって、よく無事だったね？」

「まあ、直接会ったわけじゃないしね。散歩したら、たまたま話を聞いたただけだから」

なるほど。

姉さんは“変身能力”を持っている。

他人に成り済ますことも、小動物にもなれる。
変幻自在、神出鬼没。

“怪盗トリックスター”の名は、伊達じゃない。

「相手はカニバリズム、なのかな？」

人肉食いの殺人事件。

“食のタブー”を犯した殺人鬼が、町にいる。

.....。

見て見ぬフリ……？

……僕は……。

「私も詳しいことは知らないの。だから、調べてきて」

「へ？」

「世のため人のため……アルくん、頑張って」

つまり、姉さんは興味はあるけど、面倒だから僕に調べさせたいのか。

「でも、昼間の授業はどうするのさ。僕はまだ……」

「それは帰ってからね。あと、この町に“使徒”が来てるみたいだから、気をつけて」

天使の微笑みに隠れた悪魔の宣告。

「い、いや、あの……なんで“使徒”が……？」

「どうせ私を追ってきたんでしょ？ 相手は序列5位……前にアルが戦った使徒よ」

マジですかー！？

「ム、ムリだよ！ 思いつきり面がバレてるし！ 勝てないよ！」

「ああ、大丈夫大丈夫。アイツは町中でドンパチやらないわよ。基本的に平和主義だから、気付かないうちに殺してくれるって」

いやああああ！？

行くも地獄。

退くも地獄。

でも、その二つしか、僕の道はない。

「うつ……わかったよ。とりあえず調べてみる。けど、別に犯人を捕まえるわけじゃないんでしょ？」

「それはアルの役目よ。調べていくうちに突き当たる壁だし、実践あるのみよ」

つまるところ。

四の五の言わずに早く行け、ということだ。

こうして。

僕はプロフィールすら紹介できずに　。

後味の悪い。

悲運の哀しい物語に、その終止符を打つことになるうとは。
この時の僕はまだ……知る由もなかった。

兄妹と僕（前書き）

ご愛読ありがとうございます！

兄妹と僕

ぽかぽか天気だった。

それはもう、このまま昼寝でも貪りたいほどの陽気。

僕は小さな兄妹が働くという小さなカフェで、ぼけ、っとテールに突っ伏していた。

「はあ……ぜんっぜん、わかりましえん……」

この町は、隠れ家から数キロ離れた場所にある港町だ。

人口は三万人。

昼間ともなれば、町はそれなりに活気付いて、人通りも多くなる。僕と姉さんの食料も、この町から仕入れているので、けっこう重宝しているのだ。

「……っていうか、夜は不気味なくらい静かなんだよね、ココ」

姉さんに促され、僕は例の殺人事件を調査していた。

殺人鬼が活動するのは主に深夜で単独犯。

逃げ延びた被害者からの証言なので、単独犯は間違いないだろう。被害者に共通性はないけど、高齢の人間はまだ被害にあっていない。

もし本当に食人嗜好の殺人鬼だとするのなら、若い肉を好むのは当然と言えば当然か。

手に入れた情報はまだこれだけ。町に着いて、二時間で集めた情報にしては、マシなほうだ。

「……平和だね……」

被害者は三人。

犯人は夜の闇に紛れて現れる。

「……やっぱり、夜中に行動しないと分かんないか……」
「お待たせしましたー」

無邪気な少女の声に、僕は振り向いた。

とてとて、と足早に注文の品を運んでくる、健気な姿。
決して零さぬように、大切に大切に急ぎ足。

「お兄ちゃん、お待たせしました！ コーヒーです」

ぷるぷる震える手で、それでも零さずコーヒーをテーブルへと置く。

「ありがとう」

「いゝえ、どういたしまして」

まだ見た目10歳程度なのに、よく出来た子である。

コーヒーをちよっぴり苦めに。

それでも独特の甘さが口の中に広がって、深い味わいを堪能する。

「コレ、美味しいね。もしかしてお兄ちゃんが淹れてるの？」
「うん！ お兄ちゃん、料理だけはすごく上手なんだよ」

なぜに“だけ”を強調したのは、あえて聞かないことにして。
僕は再び、テーブルに突っ伏した。この猟奇的殺人事件が最初

に起きたのは、まず一ヶ月前。

僕たちが隠れ家に到着したのと、ほぼ同時期にあたる。

最初の犠牲者は女性。まだ二十代半ばといった若さだが、第一発見者はそのあまりに無残な姿に耐え切れず、嘔吐したという。

初めは、野犬か何かに食い散らかされた跡だと捜査側も思っていた。

だけど、捜査が暗礁に乗り上げた時期に、第二第三の事件が起きたことで、同一犯による猟奇的殺人事件だと判断したのである。

死体は、もはや人型でなくなっていた。

あまりの惨状に細かい描写は控えるけど、まず普通の人間には直視することができないだろう。

それほどまでに酷い、常軌を逸した犯行。

けれど、不可解な点が二つある。

一つは、血液である。

通常、カニバリズムによる殺人であれば、その目的たる“肉”が主要なはずだった。

しかし、この殺人鬼は二度目の犯行時に、その“肉”をほとんど残している。

そして、もう一つ。

襲われた被害者にこそ共通点はないが、その、“失われた部分”には、ある共通点があった。

“脳”である。

被害者の死体すべてに“脳”がなかった。

今だに未知数とされる人体のブラックボックス　殺人鬼が探し求めた食材が“脳”なのか。

まさしく、猟奇的殺人事件であった。　ぼく……と表通りを眺

めながら事件の整理をしていると、その傍らでジュー、っと見つめてくるつぶらな瞳に気付いた。

コーヒーを持ってきてくれた少女だ。

「……な、何かな？」

も、もしかしてまさか、一目ボレされたとか？

どうしよう！？

相手は、まだ10歳の女の子だぞ！　だけど、僕には姉さんがいる！

気持ちは嬉しいけど、それを受け取るわけにはいかないんだ！

でも、まだ幼い少女を傷つけてしまえば、その心の傷は計り知れない！

ノオオオオオオオ！？

どうしよう！？

ヤバイ！

軽くヤバイ！

「……あのね……」

きた！

ついにきた！！

待て！

待て！

待てええええい！！

その先を言わせるわけにはいかない！！

「ありがとう。気持ちは嬉しいよ」

優しく。

なるべく優しく話す。

「でもね、僕には好きな人がいるんだ。今はまだ伝えられないけど、でもいつか伝えたいんだ」

少女は、黙っている。

「だから、君の気持ちは受け取れないんだ。僕は不器用だから、気持ちに正直でいたい」

ちらり、と顔を見る。

少女はその瞳に大粒の涙を……。

涙を……………。

「ふわああ……………」

「……………」

……涙を浮かべながら欠伸していた。

それはもう。

どこからどう見ても、見事な欠伸。

きつと、昨夜は夜遅くまで起きてたんだろう。

「あ、ごめんない……えっと、はい、あの何でしょう？」

おまけに、おいの話を聞いてなかとですか！？

どげんしたとです！？

「あ、あれ……？ あの君は、何て言おうとしてたの……？」
「ピア？」

少女の名前はどつやらピアらしい。

「えっとね、ピアはね、お兄ちゃんが仕事なくて困ってそうだったから、良かったらここで働いてみるのはどうかな、って言おうとしててね、それでね、うんと……うんと……」

……。

……。

つまり、僕が職なしのプーターローに見えたってわけね……。

……職なし……。

……プーターロー……。

……。

アルは、生まれ変わらんといいんどです！？

って、ちがあああああう！？

ぶわっ……。

もう、半泣きだった。

少女の優しい勘違い。

嬉しいやら悲しいやら分からんとです……。

「……うん、だいじょぶだよ……お兄ちゃんは、今を一生懸命、生きてるから」

あれれ？

おかしいな？

視界が滲んで、よく見えないよ……。

「そっか！ お兄ちゃん頑張つてね！」

そうして、とてとてと走り去る健気な姿。

周囲の客席からは失笑の嵐。

「すみません……ピアが失礼なことを言って」

「いや、いいんだよ……うん……？」

はて、と振り返る。

そこには見知らぬ少年が一人、心配そうに僕を見上げていた。そういえば、この店は兄妹が働いていた、って聞いたっけ。

なるほど。

そう言われれば、彼も妹に負けず劣らず美少年である。
成長したら、二人とも抜群にモテるだろうね。

「……君は？」

「あ、すみません。僕はクリア、ピアの兄です」

おまけに兄妹そろってよく出来ている。
親の顔をぜひとも見てみたいね。

「クリアくんか……兄妹で働いてるんだね？」

「はい！ お婆ちゃんのお手伝いをしています！ 人手が足りないから、僕たちが助けてあげないといけないんです！」

ぶわっ……！

感動です！

聞きました！？

お婆ちゃんを助きたいその真心……！

なんて家族愛……！

「クリアくん、頑張つてね！」

「はい！ お兄ちゃんもまた寄ってくださいね」

もちろんですとも！

コーヒーの百杯二百杯くらい頼んであげるよ！

クリアくん。

ピアちゃん。

君たちのためにも。

殺人鬼を捕まえよう。

「よし、頑張るか！」

ぽかぽか天気 of 眠気に負けず、僕は再び調査に乗り出したのだ。
た。

織田と使徒と僕（前書き）

主人公の出番が少なくなっていますが、皆さん応援してあげてくださいね！

織田と使徒と僕

情報の少ない殺人鬼を特定するには、まず足を使う。

現場だ。

殺された被害者の遺体遺棄現場。

あるいは、犯行現場と思しき場所。

捜査は地道だ。

華やかな逮捕の前に、過酷な忍耐力と集中力が試される。

殺人鬼の活動時間は、まず深夜だ。

昼間は人が多すぎる。

つまり、よほど人目のつかない場所に行かない限り、昼間は安全ゆえに捜査とは、逆に危険な場所へと踏み込まなければならない場合もある。

この状況も、そうした緊急を要する事態だ。

「へっへっへ……さあ、もう逃げられないぜ？ 早く俺たちと遊ぼうじゃねえか」

若い女性が一人、数人の男たちに取り囲まれていた。女性は恐怖のあまり、畏縮してしまっている。

「そうだぜ？ 何も怖えこたあない」

「そうそう！ 逆に天国を見せてやるからさあ」

男たちは三人。

いずれも喧嘩慣れた空気を身に纏っている。
時にリーダー格の男は鍛えられた筋肉の持ち主だった。

「オラ、早くこい！」

「ヒッ　！？」

声にならない悲鳴。

ケラケラと笑う男。

それは。

あの時とまるで同じ。

村を破壊した男と僕の圧倒的な実力差。

非道な暴力の前では、力のない正義など無意味に等しい。

結局は蹂躪され、その無力感に泣くだけだ。

だが。

今は違う。

少なくとも、僕には、彼女を助けられる力が、ある。

200年の歳月を経て培った努力の“力”。

今こそ、使うべきだ。

だから僕は、言った！

「その人を」

「待てえええい！」

耳をつんざく大音量。

煙を上げながら急速に近付いてくる、正体不明の人間（？）

「お、織田さん……?」

間違いない。

息を切らしながら颯爽と現れた正義の味方。

そして壁に隠れたまま出遅れる僕。

……。

ま、まあ、真打ち登場みたいな感じもあるからね……グスツ……。

「お主ら、人間として、男として、恥ずかしいと思わんのかああ!」

男たちと女性との間にいきなり割って入り、説教を始める勇敢な僧、織田さん。

その熱い魂にこそ心を打たれた男たちは、こう言った。

「ジジイがでしゃばんじゃねえよ!」

「ブツ殺しちゃうよ?」

「舐めた口、引き裂いてやんよ!」 荒れております。

織田さんの説得に耳を貸さず、男たちは予告もなく殴りかかった!

女性を庇いながらも、無抵抗ながら暴力に耐え続ける織田さん。
僧は殺生に厳しい。

織田さんの無抵抗も、そうした“枷”があるのだろう。

「クソ弱えじゃねえか」

「ハッ！ 張り合いねえヤロウだな！」

ペツ、と倒れ伏した僧に唾を吐く男。

おい。

それはやりすぎだよ。

胸の奥が熱い。

視線が外せない。

全身の細胞が“行け”と命じている。

ああ。

行くさ。

さあ、戦おう。

奴等は哀れな獲物。

息を潜めるハンターに気付かない弱者。

さあ。

狩りの、時間だ。

「お前ら」

「待て」

その声は、穏やかに響き渡って聞こえた。

僕がいる場所とは真逆の向こう側。

そこに、陽炎のような闘気を身に纏う男が一人静かに近付いてくる。

男たちの身体は震えていた。

喧嘩慣れしたからこそ分かる、彼我の戦力差。

相手の力量を計ることは、時として喧嘩以上に重要となる。

「離してやりなさい」

男が一步近付くたび。

彼らは一步下がる。

けれど。

そのまま逃げるには、彼らは若かったのだ。「ハン、なんだよ！ お前もこいつみたいにボコボコにしてやろうか！？ ああ！？」

僕は首を振る。

止めておけばいいのに止められない若さゆえの過ち。

彼らの前に立つ男は、僕ですらも殺されそうな実力者だ。

魔導協会が誇る、十人の超人たち。

“執行者”たる者たちの頂点に立つ、ただ一人で万軍に匹敵する存在。

かは“鋼鉄の使徒”

名を、草薙くさなぎ 時真ときさだ

“鋼鉄王”なる二つ名を持つ、序列5位の破戒僧である。

「てめえ！ ブッ殺してやる！」

リーダー格の男が意気揚々と挑みかかる。

だが、草薙にとって、彼は敵とすら見なしてはいない。

果敢にも彼の間に踏み込んだ男は、視認もできない拳で宙を舞う。

それはさながら、人型の風車。

血飛沫を撒き散らして舞い上がる鮮血遊戯。

凄まじい一撃だった。

人が回転しながら宙を飛ぶ、という、目を疑うような光景に、言葉などあろうはずもなく。

悪魔じみた使徒を前に悲鳴と尿を漏らしながら残された男たちが逃げていく。

それで終わりだ。

使徒が相手では、誰が戦おうとノーチャンス。

ましてや、序列5位の“鋼鉄王”はその肉体を武器とする使徒だ。その彼に格闘戦を挑むなど、無謀を通り越した自殺行為である。

……あれは効くよね。

僕は結局、壁に隠れたまま一部始終を見ていただけだった。

っていうか、入る余地なしです。

むしろ、あのアップパーを食らった男に同情。

だって、僕も食らったから。

姉さんの言葉に騙され意気揚々と距離を詰め、武器すら手にしていない彼に『意外と大したことないな』なんて思った後のアップパーカット。

あの日に感じた13回の“死の予感” その栄えある第一回目だ。

忘れてくても忘れられないんだよおおおお！

うつ……………。

そんな素敵破戒僧は、その揺らめく闘気を消し襲われていた女性に微笑みかける。

「怪我はないか？」

「は、はい！ あ、ありがとうございます！ な、なんとお礼を……」

「気にするな。私は人として、彼らの狼藉を制しただけだ」

年の頃は30代か。

清潔に整えられた黒髪と理知的な黒瞳が、東洋の出身であることを窺わせる。

「せ、せめてお名前を……………」

「いや、名乗るほどの者ではない」

……………。

お決まりだね。

っていうか、本当なら僕があ立場なんだけどね。

こう見えても、主人公ですから！

……………うつ……………。

「で、でも……………お願いします！ お名前、お名前だけでも、どうか……」

ああ、ありや一目ボレだね。

っていうか、本当なら僕に恋してたはずなのにね。

.....。

チッキシヨオオオ！？

こんなの見てられるかあああああ！

帰る！

もう僕は帰る！

そうして再びカフェ。

コーヒーを頼んだままテーブルに突っ伏してる僕に。

「.....お兄ちゃん。私、やっぱりお仕事、頼んであげよつか？」

「ダメだよ、ピア。男は、人生の壁を自分の力で乗り越えないと」

心優しい兄妹に、応援してもらったのだった。

第四の生贄（前書き）

中座してすみません！これからも応援、よろしくお願いします！

第四の生贄

風のない、しかし肌を震わせる冷氣に満ちた夜だった。

寝静まった住宅街は、すでに薄闇のカーテンで仕切られている。等間隔に連なる街灯の仄かな明かり、闇路の両脇に建ち並ぶ家々もまた、窓越しに漆黒を孕んで眠っている。それは朝日を待つ生者の沈黙のようであり、あるいは月を迎えた死者を畏れての拒絶であるのかもしれない。

「ふう、今晚もやたらと冷えやがる。寒いねえ」

この、松明を標とした洞穴のように細長い闇路を歩く男は、熱を奪う冷氣にうんざりした様子だった。

襟をまくし立て隠す猪首、突き出た腹部に鈍重の足。健康的すぎる男の体は代謝が追い着かず、余分な重さに縛られている。

「こりゃ、帰ったら一杯でも飲まんとやってられねえな。芯まで冷えそうだぜ」

彼は精肉店に勤める調理師だった。朝から昼間にかけては馴染みの店へと注文の材料を届け、夕方からは今夜の晚餐に頭を悩ませる客で賑わいを見せる。彼自身の大胆な人柄に好感を持つ者も多く、忙しい仕事の帰りは必然と遅くなってしまうのだった。

もちろん、それは彼にとって嬉しい悲鳴である。妻と結婚して以来、すべてが順風満帆だった。この、通い慣れた道を真つ直ぐ帰れば、美しい妻の手料理が待っていてくれる。結婚して20年も経つが、彼女の笑顔は何ら色褪せることなく自分を迎えてくれるのだ。それが幸せでなくて何だというのか。

彼は幼い頃から肥満体型にあり、それゆえに同年代の友人から笑

われることも少なくなかった。自分の体型を逆手に取り、輪の中心に位置することで悔しさは紛れたが、それでも女性に縁のない生活というのは変わらなかった。

実家の後を継ぎ、精肉店で働く彼の出会いはあまりない。休日も少なく、友人と食事することもままならないのでは紹介すらも難しい。親から勧められた見合い相手も第一印象で二度目はなく、自棄酒に暮れる夜が彼を孤独にさせた。

だから彼は思う。妻と出会えたのは間違いなく奇跡だと。友人に誘われたホームパーティー、そこで紹介された女性が運命を象徴することになるとは、彼自身も信じられなかった。

自分の容姿に嫌悪を持たず、他にも多くの男が言い寄る彼女がまさか、自分と結ばれるなんて。それ以来、彼の人生は一変した。今まで疲労感に苛まれていた日常が、たった一人の女性がそばにいてくれるだけで苦にも感じなくなる。

「今日はどんな料理かな。ああ、待ち遠しいぜ」

自分でも単純だと思う。だが、それが人生だとも思う。ほんの一瞬间の出来事で、人は生まれ変われるのだ。彼の世界は祝福に満ち、その幸せが永遠であることを切に願う。「寂しがつてるだろうか。今夜は少し、常連から聞いた笑い話を聞かせてやるか」

細い闇路は左右に分かれていた。ここを右に曲がれば、後は自宅まで一直線だ。少し遅い、けれど温かく美味しい夕食を作ってくれる妻の待つ場所への岐路。遠回りをする必要はない。このまま戻るべきだ。

彼は疑問の余地なく足を右に運ぶ。わずかに肌を撫でた風に体を震わせ、無意識に立ち止まった。今夜はいつにも増して冷え込んでいる。昼間の暖かさが嘘のようだ。

「まったく、冬でもねえのに。近頃じゃあ気味の悪い事件も増えてるし、どうなってんのかね、まったく……」

一人愚痴りながら再び歩こうとした時、街灯に凭れかかった人影の姿を捉えた。何かに掴まっていなければ立つこともできないのか、落ち着かぬ足取りがフラフラと、やがて膝を地面につけて座り込んでしまった。

ただの酔っ払いだろうか。この寒さじゃあ、飲みたくなる気持ちもわかるものだ。彼はたまらず人影のそばへと走り寄った。

「おい、アンタ。大丈夫か？　こんなになるまで飲んでたんじゃあ、家に帰ったら旦那さんに叱られるだろうぜ」

不調に苛まれている人物は、どうやら女性であるらしかった。長い金髪が美しく揺らめき、仄かな香りが彼の鼻腔をくすぐる。

「ほら、ここで寝ちまったら凍死するぞ。家はどこだ？　具合が悪いなら、俺の家に寄っていくかい？」

これに女性は首を横に振った。近頃は奇妙な事件が起きている。彼女が慎重になるのも仕方ないが、それでも疑われているのは心外だった。

「じゃあ、早く立って家に帰らなきゃな。ほら、手に掴まれよ」

彼女の手は夜の冷氣に当てられたせい、びっくりするほど冷たかった。きつと千鳥足で彷徨い歩いたのだろう。彼はため息をついて、彼女を引き起こす。彼女は力なく、彼に抱き付くように体を預けた。これにはさすがに男も困惑したが、所詮は酔っ払い。何かに凭れていないと立つことも難しいのだろう。

やれやれ、と彼は仕方なく女性の肩を軽く叩いた。女性に抱き付かれて悪い気はしないが、妻にでも見られたら面倒だ。呼び掛けても応答がないので、彼は優しく女性を離そうとしたが。

離れない。それは女性が、彼の力ではビクともしないほど強く抱き付いているせいではない。奇妙なことに、彼の体はまったく力の入らない不可思議な状態にあった。

「あ、……、え……？」

女性の肩に置いた自分の手が、油断すればすぐにでも滑り落ちそうだった。視線すら虚ろに漂わせ、ただぼんやりと力が抜けていく感覚が言い知れぬ恐怖を致命的に麻痺させていた。

何が起きたのか、考えることも億劫な空虚感が全身を冒していく。異常だ、何かがおかしい、と心が訴えていても頭が異常を理解できない。そうして薄れゆく意識の中で、ようやく違和感の正体に気がついた。

（この女……ぜんぜん酒の臭いが、しないんだよな……）

やがて、男は糸が切れた人形のように地面に倒れた。鮮やかな赤が滴る唇を手で拭い、女は街灯に隠していた金鎚を倒れた男の頭部に振り下ろす。

悲鳴すら許さぬ致命傷だった。花火のように飛び散る鮮血が彼女の全身を赤く染め、不吉を謳う殺人鬼が町を密やかに蝕んでいく。血に濡れた女は、足下に横たわる“肉”を眺めながら、かすかに微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8692c/>

アル・ラースの日記

2011年1月15日14時26分発行